



夏が到来しました。夏と言えば、海！そして川！海、湖、川など、水のある所には安らぎと落ち着きを覚えることが多いそうです。それは、人が生きるために必要な水を本能的に欲しているからでしょう。

世界的にも文明や文化の中心は常に水（主に河川）とつながってきました。エジプト・メソポタミア・インド・中国のいずれも河川によって文明が育まれてきたことは周知の事実です。

もちろん川内川も例外ではありません。

太古より長い歳月にわたって下流へと土砂を運び、豊かな平野を形成してきました。川内川の恵みが人々の生活を支え、また水陸交通の要としてこの地を発展させたといわれています。

そんなわけで、今回は川内川について、調査したいと思います。

川内川って？

川内川は、熊本県の白髪岳を源流とした一級河川で、宮崎県のえびの市を流れ、鹿児島県に入り、さつま町を通り、最後に薩摩川内市から東シナ海に注ぎます。その長さは、137kmに及び九州でも筑後川の143kmに次ぐ第2の長流となっています。

熊本県や宮崎県にも流れる川の名に我が薩摩川内市の名前が冠されているのは、少し誇らしいですね。

そして、川内川の水は、生活用水（飲料水や洗濯、お風呂など）や工業用水、農業用水など、私たちの生活に密接に関わり、時にはウナギ、アユ、カニなどの恵みももたらしてくれています。



季節によってさまざまなる風景を見せてくれる川内川

川内川では、5月には「川内川に鯉のぼりを上げる会」により、水際を泳ぐこいのぼりの姿が見られます。

また、「川内川花火大会」も夏の大きな風物詩として、私たち市民の目を楽しませてくれます。

そして、秋から冬にかけては、「川内川あらし」が、特別な気象条件がそろった時にだけ出現します。日本では、3例（愛媛県大洲市・兵庫県豊岡市・鹿児島県薩摩川内市）しかない貴重な気象現象です。

人が集う川内川

川内川では、人が集うイベントも数多く開催されています。

これまでに、「川内川を日常的に楽しむ風景をつくる」ことを目的にリバーフロントマルシェが開催され、そこから川内川の拠出施設として発展した「SOKO KAKAKA」が誕生しました。

川内川を会場に行われるボート競技「川内レガッタ」や「川内川ウォーキング大会」も、人が集うイベントの一つと言えるでしょう。

春と秋には、果樹苗、鉢花などが並ぶ「春・秋の木市」が催され、今年5月には、初めての開催となる



川内川での音楽祭「2022 river side music」が開催され、多くの人でにぎわいました。

癒やしの空間としての川内川

朝・夕には、川べりを散歩やジョギング、サイクリングで楽しむ人の姿も見られます。特に夕刻には、水面に映し出された夕日が、キラキラと揺らめき、その光景は、家路を急ぐサラリーマンも、思わず目を奪われ、時を忘れて立ち尽くしてしまうほどです。

ゆったりと静かに水をたえ続ける川内川の日常が、本市で暮らす人々の癒やしの空間になっているのだなあと感じる事ができます。

